

は じ め に

奈良国立文化財研究所は考古、歴史、建築、保存科学、計測など多くの部門の専門家が総合、または分野別に広く文化財の調査・研究、公開普及活動を進めている。本年報は1987年度に行った当研究所の各部門ごとの事業の概要を、簡略に紹介するものである。

飛鳥藤原宮跡発掘調査部では部創設以来の念願であった新庁舎の建設が始まり、研究活動の恒久的な拠点がようやく姿をみせようとしているが、須弥山石、石人像の出土で知られる石神遺跡の調査は次数を加えて今年度も引き続いて実施されており、齊明朝の広大な遺構の全容が解明されつつある。また飛鳥地域ではこれまで実態の知られていなかった奥山久米寺でかなりの規模の調査区を発掘する機会があり、当寺が塔・金堂の南北に連なる四天王寺式もしくは、山田寺式の伽藍配置を持つことが、遺構の上から確認された。藤原宮では、東方官衙地区の調査が進み、初めて一つの官衙の規模を推定するに至っている。

平城宮では、兵部省、造酒司などの調査が進み、従来の官衙配置の推定が裏づけられ、具体的な様相のわかる役所の数が増加しつつある。平城京については左京三条二坊一・二・七・八坪の4町を占める大規模な邸宅の全容が浮びあがり、この宅地の主が奈良時代の初めに権勢並びない地位にありながら、藤原氏の反感をかって悲劇的な最期を迎えた長屋王であったことが確認された。さらに続行された最近の調査では三万点にのぼる膨大な量の木簡が出土し、奈良時代の大貴族の日常生活の細部など続日本紀の記述を補なう貴重な資料を提供することになった。また、左京二条二坊十四坪の発掘では平城京期の遺構の下層から、旧石器時代の石器群が発見され、平城京以前のこの地の遙かな歴史に思いがけない光をなげかけている。

そのほか古文書、町並、庭園などの調査や法隆寺昭和資財帳関連の調査の一部を収録したが、このような調査研究活動のほとんどは、単年度で完結するものではなく、まとまった成果として発表されるまでには、更に日時を要する作業の積重ねの一区切りというべきものである。

飛鳥資料館では春と秋に「万葉の衣食住」、「壬申の乱」の二つの特別展を行ない、学問的な成果を出来るだけ理解しやすいイメージにまとめるという、これまでにない試みを行なって好評を得た。

研究所をとりまく諸環境が一層きびしさを増す状況の中で、所員一同が日頃進めている研究、調査、公開の事業の一端を本年報によって御理解いただくとともに、今後とも各方面の御支援と御鞭撻をお願いする次第である。

1989年2月

奈良国立文化財研究所長

鈴木嘉吉